

『とある父親ちちおやと娘むすめの話はなし』

作者 浅羽 一

何処にでも居そうな冴えない中年サラリーマンとして、今年で五十を迎える吉沢には、娘が三人いた。ずいぶんと前に妻を亡くして彼にとつて、さして華々しくもない日々を生きる意味と云えば、そんな三人の娘達を養う為というものだった。

だが、この娘達が少なからず厄介だった。もうじき二十七歳になる長女の佐奈子は、いわゆる大食で、きらびやかな洋服よりも宝石よりもただ甘い菓子と腹に溜まる炭水化物を何よりの幸福としていた。とは言え、現実問題として、首どころか関節の在処さえ判然としなくなった巨体に似合う服飾なんて、滅多に無かったのだけれど。

二十三歳の次女の和子は、姉と対照的に痩せぎすで、胸がなければ足も鶏みたいに細く、することと言えば日がな一日、自室の布団に籠もって朝も夕もなく眠り続けているくらいだった。時折、佐奈子が部屋の前で軽食の載った盆を置いておくと、いつの間にか器が空になっているので、一応はそれが彼女の生存を示す証となっていた。

そんな二人の姉とはまるで異なり、二十歳になったばかりの三女の美子は姉妹の中でも一番の美人で、実際、数え切れないくらいの男と一夜限りの交際を繰り返しているほどだった。けれど、それは化粧をしている場合に限つての話で、素颜はと言えば、姉妹で唯一の一重まぶたで、薄い眉毛と腫れぼったい目はさながら平安時代の美人画を思わせるものだった。

吉沢にとつて、この三者三様の姉妹は、もう何年もの間、徐々に薄くなりつつある頭を悩ませる種であり、しかしながら見捨てる事も出来ない愛すべき娘達であった。

彼はことあるごとに娘達と話をしようとした。夕食のテーブルを挟んで、自身の倍はあろうかという佐奈子に対して「お前も、もう少し食う量を減らして女らしくなったらどうだ」と言った。佐奈子はその都度、首の肉を揺らしながら豪快に笑い、「食べるのを止めるくらいなら女を止める」と断言した。「食べている間だけは、嫌な事を忘れられるのよ」。顔と口調だけは明るく、さりとて眼差しは単調な佐奈子にそう言われると、吉沢には何とも返す事が出来なかつた。

また、たまに和子の部屋を訪れては、控え目に扉をノックしてから、「暗い所ばかりにいては体を壊すから、たまには起きてきて太陽の光を浴びたらどうだ」と告げた。何度目かの時、思いがけず返ってきた回答は、「眩しすぎて目が疲れるから太陽は嫌い」と言うものだった。「夢を見ている間だけは、嫌な事を忘れられるのよ」。薄い木の板越しに届く声は、儂いながらも頑なで、吉沢は握った扉の取っ手を引く事が出来なかつた。

これを言うとき驚く人も少なくないが、美子は毎日、明け方近くではあつたけれど必ず家に帰ってきた。吉沢は控え目な鍵の音が聞こえるたびに玄関へと向かい、気怠げな顔で入ってくる美子に「今さら門限をうるさく言う気はないが、せめて付き合う相手くらいは決まった男にしたらどうだ」と説いた。美子はそれに悪びれる様子も見せず、「ほとんど無関係な相手だから、お互いに気楽でいられるんじゃない」と言つてのけた。「男と過ごしている間だけは、嫌な事を忘れられるのよ」。冷めた態度で呟く美子に、父親であると同じ時に男でもある吉沢はもう上手な接し方を見つけられなかつた。

吉沢はたびたび、これからどうすればいいのだろうかと自問した。反面、何がいけないかだったのである。己のやりたい仕事にかまけて、小学校や中学校に通う娘達の友人の名前どころか、彼女たちが普段どんな暮らしをしているのかさえ知らず、挙げ句の果てには病弱

だった妻の体調の変化にも気付いてやれず、結果として思春期に母親を亡くした少女達の慰め方さえ分からず、そんな父親とは名ばかりの男の身勝手な生き方が、彼女たちの生き方を歪めてしまったのは明白だった。ただ、それでも救いだったのは、まるで重ならないような三人の娘達が、しかし互いに相手を大切に思い合っている事だった。とは言え、それも信じられる相手が姉妹だけしかいなかったせいだと考えれば、手放して喜べる事ではないのだろうけれど。

それぞれが特徴的な娘達の姿に、吉沢は己の人間としての業の深さを感じずにはいられなかった。だが、たった一人、そんな彼を優しく励ましてくれる人間がいた。吉沢と同じ会社で事務を担当する女性、潮田実也子<sup>しおたみやくこ</sup>だった。

吉沢と実也子の関係はもう四年になっていた。そろそろ四十を迎える実也子は、決してそれほど器量好しではなかったものの、料理が上手く、よく働き、また夜は時に激しく時に淑やかで、要するに女として具合が良かった。

子供はいないものの、すでに一度、結婚と離婚を経験していた彼女は、年下でありながらとても思慮深く、しばしば吉沢に助言をしてくれていた。時に親である彼に味方し、時に同性である娘に同意し、実也子の言葉は吉沢にとって本当にありがたいものだった。だからこそ、そうしている内に、単なる同僚としての好意が、いつしか年を経るに連れ男女の愛情に変化していったのは、ある意味では自然の流れだったのかも知れない。

「佐奈子ちゃんはきつと不安なのよ。だから、それを誤魔化す為に食べ続けるのよ。満腹感は、それが消化されてしまうまでは幸せな気持ちでいさせてくれるから」

「和子ちゃんは寂しいんじゃないかしら。だから、夢の中で現実にはいない人を捜そうとっているのかも知れないわ。だけどそんな夢はいつ見られるとも限らないから、ずっと眠っているんじゃないかしら」

「美子ちゃんはとても純粹なんだと思うわ。だから、どれだけ遅くなっても余所に泊まらず家に帰ってくるんだと思うの。化粧を落とした顔を見せられないからって言うのは、単なる言い訳じゃないかしら」

実也子が落ち着いた声音で「みんな、悪い子じゃないのよ」と言ってくれるたびに、吉沢は未来に浮かんでいるかすかな光を改めて確かめられる気がした。

ただ、それほど感謝していながらも、吉沢には一つだけ、実也子に対して受け入れられない部分があった。それは、彼女との付き合いが三年を越えた辺りから、頻繁に彼女が結婚をせがんでくるようになった事だった。

勿論、吉沢は三人の娘だけでなく、ちゃんと彼女の事も心から愛していた。しかし、だからこそ彼はその想いに応える事が出来なかった。

「どうして私と結婚してくれないの」  
「あの子たちの人生を君にまで背負わせる事は出来ないよ」

実也子に悲しそうな瞳を向けられるたび、吉沢はそんな答を返してやる事しかできなかった。正直なところ、もしも彼女に他のいい相手が現れたなら、その時は別れる事も仕方ないと諦めていた。

そうして相変わらず、長女は食らい、次女は眠り、三女は遊ぶという日常が続いていた。吉沢は覚悟していた、「自分はこの先、死ぬまでずっと娘達の面倒を見ていくのだ」と。けれど同時に、「もしも自分が死んだら、この子達は一体どうなるのだろう」と不安も抱

えていた。

だが、変化は突然に訪れた。美子が妊娠したのだ。仕事から帰るやいなや、珍しく三人揃って部屋にいた娘達からそれを告げられた時、吉沢は最初、怒ればいいのか嘆けばいいのか分からなかった。喜ぶべきだとは考えられなかった。

美子は言った、「墮ろすつもり」だと。佐奈子も「それが良い」と頷いた。父親が誰かさえ分らない子供なんて、生まれてきてもその子自身が可哀想だと語った。

反論したのは和子だった、「そんな間違っている」と。「せっかく出会える命なのに、簡単に無かった事にするのは間違ってる」。

そして三人は吉沢を見た。六つの目が、「あなたは何て言うつもりなの」と問うていた。

吉沢は、何とも答えられなかった。

「佐奈子が正しい」と言うのは簡単だった。「和子の言い分にも一理ある」と述べるのも可能だっただろう。「そもそも美子はどうしたいんだ」と父親然として尋ねるのも良かったかも知れない。けれど、現実の吉沢に出来た事と言えば、逃げ出しそうになる体を何とかその場に固定したまま、必死で「こんな時、この子達の母親が生きていれば何と答えたらだろうか」と結論の出ない自問を繰り返す事だけだった。

果たして、三姉妹は不甲斐ない父親にそれ以上の何かをする事もなく、揃って部屋を出て行った。後にはぼつんと吉沢だけが取り残された。

翌日、昨夜の出来事を実也子に話すと、彼女は開口一番に「情けない」と断じた。てつきり慰めて貰えるとばかり期待していた吉沢は、気を悪くするよりもむしろ驚いてしまった。

彼女は滅多にないほど厳しい口調で、「頼ってきた娘達に大丈夫の一言も言ってやれないで、何が父親よ」と語った。「綺麗に解決して欲しいわけじゃないの。ただ、ほんの少しでも不安を分かち合ってたのならせめて、単にお金を稼いで生活を見てくれるだけの相手に、感謝はしても、どうして心から信頼まで出来るのよ」。

吉沢は丸く口を開けたまま、何言も返す事が出来なかった。

「何が正解なのか分からなかったのならせめて、どうするのが一番良いのか一緒に考えようって、そう言うって上げるだけで良かったのよ」

「……………」

「この世界を嫌いだと言っていた子たちが、それでも父親を、現実にいるあなたに聞いてくれたのよ。あの子たちは、私みたいな他人でも、もう傍にいないお母さんでもなく、あなたの言葉を待っていたの」

全くもって、実也子の言う通りだと吉沢は思った。直後につくづく自身を情けないと思っただけ。何より、そんな己を少しでも親らしく良く見せようなんて考えてしまっていた事が、本当に浅ましく無様だった。

家に帰ると、佐奈子が台所で夕食の支度をしていて、和子は部屋で眠っていて、美子はすっぴんのままりビングでテレビをぼんやりと眺めていた。

この日も、三人の娘が皆、家にいた事が決め手となった。吉沢は意を決した。

彼はつまみ食いをしていた佐奈子に「話があるからリビングに来なさい」と告げ、和子の部屋の扉を叩いて「すぐに起きてきなさい」と言い、さらに美子の見ていたテレビを消して「とても大切な事なんだ」と語った。

ややあって、佐奈子はマヨネーズをたっぷり掛けた魚肉ソーセージを握って、和子は寝癖の付いた髪を苛立たしそうに掻きながら、美子に至っては吉沢に憎むべき男の代表を見るような眼差しを向けていたけれど、それでも二人ともが彼の前に現れてくれた。

「昨日の話だが」と、吉沢は娘達の顔を見渡してから話し始めた。こんな風にちゃんと向き合って喋るのは久しぶりと久しぶりの事で、その声は少なからず緊張していたが、迷っている感じはしなかった。

「社会的に見れば、きつと佐奈子の言った事が正しい。だが、体の事を考えれば、無理な手術なんて出来れば受けさせたくない。だから、最後には母親である美子が真剣に考えて決めるべきだと思う」

「要するに、勝手にしろって事？」と、佐奈子が冷たい声音で聞いた。

吉沢は「違う」と即答した。「どんな選択をした所で、俺はそれを認めると言う事だ」。

「それって、無責任じゃない」。和子の言葉は短いなながらも辛辣だった。それでも吉沢は「お前達の全てを受け入れるのが俺の責任だ」と応えた。

「偉そうに。今さら物分かりの良い父親ぶるつもり？」

吐き捨てるような美子に対し、吉沢は「お前達がどんな風に思おうとも、俺がお前達の父親だ」と言い切った。「それだけは、何があっても、いつそお前達が嫌がっても、一生変わらないんだ」。

三姉妹は、もう何も言わなかった。佐奈子はせつかくのソーセージに口を付けもせず、和子はぼさぼさの髪を指でいじり、美子は誰にも視線を向けることなく、ひたすら無言を貫いていた。

吉沢は、そんな娘達の反応を見ながら、本音では多少なりと不安も抱いていたのだけれど、それでも後悔はしていなかった。だから、それで良いのだと思った。もしかしたら、これから時間が経って、そうしてようやく後悔が襲ってくる場合だって絶対には言い切れないけれど、とりあえず今はそんな事を気に病むよりも、しばらくぶりに家族四人で食卓を囲めそうな事実に期待していた。佐奈子の事だ、きつと一人じゃ食べきれない量の食事を用意しているはずだった。

結論から言ってしまうえば、美子は子供を産む事に決めた。そして、彼らの相変わらずの日常は、しかしほんのかすかな変化も見せていた。

佐奈子は僅かに食事の量を減らした。と言っても、それは今まで一日に三個入りのプリンのパックを全て食べていた所を、三日に二パックにしたとかその程度の話だったけれど、それでも食費がそれまでの三分の二になると考えれば大きい節制だ。加えて、彼女の最近の楽しみは自分が食べる事だけではなく、やがて生まれてくる赤ん坊の為に離乳食の研究などをする事も含まれているらしかった。

和子はやはり一日の大半を寝て過ごしていたけれど、ごく稀に出勤前の吉沢の向かいで飯を食べる姿を見かけられるようになった。例え、それが寝起きの朝食ではなく、就寝前の夜食的なものであったとしても、これから仕事に出掛けようとしている吉沢にとってそれは朝から喜ばしい出来事だった。

美子を見るからに腹が大きくなっていた。派手だった化粧は若干だけれど大人しめになり、また遊びに行く先も繁華街ではなく妊婦が集う出産の為のセミナーや子供服の品揃えが豊富なデパートなどがほとんどになった。当然ながら、初孫の愛くるしい姿を想像

する事は、吉沢にとっても胸が躍る事だった。

実也子は浮かれる吉沢に呆れた風に苦笑しつつも、「幸せそうで良いわね」と言った。「やっぱり、出来れば私もあなた達に混ざりたいわ」。

「だけど、今度からはさらに赤ん坊まで増えるんだ。これまでに忙しくて大変になるだろうし…」

「あら、素敵じゃない」

そして実也子は気遣わしげに言葉を選ぼうとする吉沢に対して、本心からそう想っているのだと分かる声で言った。「妻に、母親に、お祖母ちゃん。女として幸せな肩書きが全部いっぺんに手に入るのよ。それって、最高じゃない」。

「……………」。あまりと言えば楽観的すぎる意見に、最早、吉沢は啞然とする他無かつた。

だけど、密かに思ってもいた。「こんな変わり者の女ならば、もしかしたらいつか娘達とも上手くやっていけるのかも知れない」と。

「何か失礼な事を考えてるでしょ」と、そこで不意に実也子が怪しそうに聞いてきて、吉沢は慌てて「そんな事はない」と首を横に振った。

しかし、実也子にとっては全てお見通しだったらしく。彼女は泰然とした口調で、「良いから。何を考えていたのか、言ってみなさい」。

吉沢はしばらく迷った末に、仕方なく素直に白状した。「君がとても変わった女だって事だよ」。

実也子の反応は、やっぱり呆れた苦笑だった。「何それ。あなたって、本当に分かってないのね」。

「何をだい？」

きよとんとする吉沢に向かって、実也子は軽い溜息を吐いてから、言った。「そんな変わり者に好かれてるって事は、つまりあなた自身も変わっているって証拠じゃない」。そしてさらに愉快そうな声音になって、「言っておくけど。あなた、相当なものよ」。

それに対して吉沢は、束の間、言われた意味を反芻するように沈黙を保った後で…。「…なるほど。そう言う考え方もあるのか」

神妙に頷く吉沢の前で、「ほら、やっぱり変じゃない」と、実也子は確信に満ちた様子で笑っていた。

〈了〉